ウクライナの戦禍に想う

昭和六年八月六日生まれの私はもちろん戦中戦後の真只中、青春を過ごして来たのです。でも今回のウクライナと違うところは、ある日突然に生活を奪われたのではなく食糧不足、満足に勉強も出来ない日々、それが私たちにとっては日常だったことです。小学校六年を卒業すると次は高等女学校へ進学し最初の家庭科で習ったのは〝モンペ〟の上下でした。丁度今の作務衣のような恰好ですが家にある母の着物の仕立て直しでした。

その内、校舎の一部に兵隊さんが駐屯する様になり、二年生になると上級生は皆動員で駆り出され、幡生の工機部、貯金局などへ出征した男の人の代わりに人手不足を補うために働きに行ったのです。

学校の門を入るとすぐ右側に別館があって、その建物には軍隊の将校さん達が泊まっていました。その食事のお世話を私達二年生が五、六人ずつ交替でしておりましたが、ご飯は煎った大豆を一晩水につけたものをお米にまぜて炊いておりました。副菜は手っ取り早いのが天ぷらで、さぞ将校さんはあきたのではないかと申し訳なく思っております。でもそのおかげで私達のお弁当にその天ぷらのおこぼれ頂戴でいただくことが出来ました。

私達二年生、一年生は漁網の網すきを授業のかわりにやらされました。その間、稲刈りや麦刈りの時期になると農家へ手伝いに行ったのです。二年生になると、戦況が厳しくなり度々警戒警報、空襲警報に毎日のようにおびやかされ、その度に学校から自宅へと幾度往復したことか、今は陸上競技場になっているあたりは昔は練兵場で何もない野原でした。そこで空襲になると身を隠すところがなく只必死で駆け抜けたのです。

七十七年過ぎた今でも忘れられないのは、二十年七月二日未明の下関空襲の時の事です。空襲警報が解除になり、やれやれと横になった途端〝ドッカン〟と耳をつんざくような音がして爆弾が落ちたのです。着の身着のまま寝ていたので、飛び起きると走って防空壕へ避難したのですが、このままだとあぶないと外に出て空を仰ぐと空から火が降っているではありませんか。こんな中どこに逃げたらよいのか迷っていると、兵隊さんが家族が離れたらいけないからと縄で珠数つなぎにして誘導してくれました（因みにその頃には兵隊さんは打つ高射砲の弾もなかったので私達が逃げるのを手伝ってくれていたのです。）夜明けと共に敵機は去り空襲は解除になりましたが、細江から唐戸一帯が焼野原になりました。

幸い私達の女学校は焼けませんでしたが、梅光女学校は丸焼けでした。その前の年でしたか、一般家庭の銅製品の供出が始まっていたのですが、その後、下関のシンボルだった日和山公園の高杉晋作の銅像もお国のために引き倒され、胴体と頭の部分がバラバラになって供出されたのです。それなのにもう打つ弾もなかった有様でした。

空襲の後数日してけがをした人を保健所迄運ぶ手伝いをさせられました。焼けただれた足などは虫が這っていましたが抱えてトラックの荷台に乗せ、私達は歩いて（その頃保健所は茶山通りを少し入ったあたりにありました）保健所に行き、先に到着していたトラックから怪我人をおろすことをさせられました。忘れられない思い出です。

その当時私達は日和山の長崎町側の一番高い所に住んでいました。関門海峡が真向かいに見渡せる所でしたが、あの八月九日の原爆が小倉に落とされていたら生きてはいられなかったと思います。後で聞いたのですが、小倉の上空は曇っていて目標通りに落とせなかったそうですが、あの日は北九州のあたりは晴れていたそうです。諸説ありますが八幡の製鉄所の煙突の煙が小倉の方へ流れていたのではないかとのことでした。お陰で私は命拾いをし、この歳まで生き恥をさらしております。

もうすぐ七月二日も、広島・長崎の原爆記念日、終戦の日と続いて来ます。あの終戦の日のことは忘れようとしても忘れられない出来事でした。八月十四日あまりにも静かな一日でした。十五日昼、父が勤め先の新聞社（空襲で焼失し、後片付けをしていました）から急ぎ帰宅し、〝みんなラジオの前に座りなさい〟と云われ、正午になるとラジオから流れる天皇陛下のお言葉を神妙に聞いたのですが、途切れ途切れで意味がわからず終りましたが、後で父から戦争が終わったこと、それも負けたことを聞かされ何を意味するのかしばらくは解りませんでした。

しかし、負けたとは言え、一番嬉しかったのは電気をつけて、着替えして夜眠れることでした。

今、ウクライナの戦禍を見聞きする中で思うことは、私達以上の恐怖にさらされた日々を送る人、他国へ避難せざるを得ない人、又、大切な家族を失った人達、街中の焼かれた住宅など、見るに忍びない、映像が毎日流れるのを見る度、二度と戦禍に合うことのない様願うばかりです。

壇之浦町　佐々木洋子

掲載にあたり

一通の投稿がありました。ロシアとウクライナの戦争が毎日ニュースで流れている現状、街が壊滅状態を見る度に下関での空襲、戦争の体験を思い出すとの事です。

原稿を読んでいると昔「カンナ炎える夏」（下関空襲の記録）という本が思い出され、編集者野村忠司氏に一部を掲載させて頂くことに了承を得ました。

下段の詩は、本の初めに掲載されています。当時七歳の思い出を二番目の妹（原紀）が三十数年前に書いています。そして、上段の文章は、その姉の当時十四歳の思い出を今書いたものです。イラストは、三番目の妹（倉本美舟）の絵です。日和山の山頂に住み共に生活した姉妹でも感じ方の違い、表現の仕方の違い、大変興味深いものです。

「カンナ炎える夏」（下関空襲の記録）編集者野村忠司氏の「結びのことば」を掲載させていただきました。人として忘れてはならない言霊ではないでしょうか。

写真は、この時代に生きた人が共に見てきた風景です。中東地区まちづくり協議会の範囲です。焼け残っていまだにある建物もあります。

「カンナ炎える夏」（下関空襲の記録）は、図書館にあります。一読してみてはいかがでしょうか。

― 下関空襲　平和に願いを ―

カンナ炎える夏
〈下関空襲の記録〉

昭和六十年七月二日発行
編集者　野村忠司

結びのことば
再び空襲することも、空襲されることもない平和で勇気のある日本でありますように。

細江町を望む

入江町・細江町を望む

入江町・丸山町を望む

唐戸町・南部町を望む

赤間町・唐戸町を望む

赤間町・唐戸町を望む

上垣内茂夫さん撮影
焼け跡の写真は、七月一日から十五日の間だった。関東大震災に遭い、記録の大切さを知り撮影したのだろうと照子(姐)さんが語っています。

亀山八幡宮側

赤間町・南部町・田中町を望む

赤間町を望む

田中町・西の端町を望む

本町・宮田町を望む

壇之浦町

君は　見たことが　あるか
陽が沈むと
すべての明りが消されたときを
星を数える　ためではない
月を眺める　ためではない
ひそかに
愛を語るのでも　なかった
それぞれに　息を　ころし
見たいものを　黒い布で被ったのだ

君は　聞いたことが　あるか
ぶ厚い　防空頭巾の　内側の音を
音をたてては　ならないのだ
赤んぼうでさえ
むずかりは　しなかった
くぐもりの中で
じっとしているしか　なかったのだ

君は　飢えたことが　あるか
ぺんぺん草を
食ったことが　あるか
春も夏も　秋と冬も
みな同じ季節に　なって
毎日が　芋がゆ　で
ペットは蚤と　おしらみさん

両親は街なかで　山羊を飼った
野菜を　植えた
奇妙な瓢箪かぼちゃが
山程に取れた
次の年　山羊が死んで
かぼちゃは　茎だけになった

ある日　公園の晋作像が
あっけなく　切られて
トラックで運ばれた
家中の
アルマイトの弁当箱が　消えた

不思議だった
大人に聞いたら
こっぴどく　しかられた
ふてくされて闇を見たが
朝も昼も
何故か見分けがつかなかった

サイレンが　鳴る
いつものように　手を握りあう
握りしめた　母の手を
ふりきって外へ

わたしは　立ち竦んだ
わたしは　見た
秘密めいた　空に
光の線が走り　無数に交叉して
吠えながら　一点を追っていた
目をふさぐことは　出来なかった
足もとから
見たこともない　火の親玉が
聞いたこともない音をたてて
飛んでゆく
両手は　耳を　ふさいでいたが
耳鳴りは唸りつづけた
山から見下す海峡は
ま昼のように燃えて
見あげると　空は深い闇

やがて　かすかに音がした
ちゃら　ちゃら　ちゃら　ちゃり
しのびながら降りて　きた
炎の上へ　叫びの中へ
それは　しずかな　火箭となって
わたしを　切り裂いて　光っていた

原　紀

「七歳の記」

SDGs

直接は16ですが、3、4、5、6、7、8、10、11、14、15も該当します。戦争で、自然が破壊され、焦土と化した国や社会の再建には、たくさんのSDGsの目標が関係しています!!　綿末しのぶ